

2-4 貯蓄，投資，経常収支の関係

(1) 経常収支の別の解釈

2-2 で導いた国民所得統計の恒等式を少し変形すると，輸出と輸入の差額として定義される経常収支の，違った側面が見えてくる。

$$\begin{aligned}
 Y &= C + I + G + CA \\
 Y - (C + I + G) &= C + I + G + CA - (C + I + G) \leftarrow \begin{array}{|l} \text{左辺・右辺から} \\ \text{C+I+Gを引く.} \end{array} \\
 Y - (C + I + G) &= CA
 \end{aligned}$$

最後の式を言葉で言い換えると…

自国でつくったもの の合計	-	自国の支出の合計	=	経常収支
------------------	---	----------	---	------

つまり，「自国でつくったもののうち，自国で食べなかった部分が外国の人に食べられる」という関係が見えてくる。ここから，経常収支を「自国でつくったものと自国で食べた・利用したものの差」と見ることもできる。

経常黒字を出した国は，つくったよりも少ない量しか食べず，残りは外国の人が食べた（＝外国に貸した）。

経常赤字を出した国は，つくった以上に食べてしまったため，足りない分は外国から借りてきた。

ただし，これらはあくまでも事後的な関係を表しているだけであって，因果関係を表しているわけではない。

つまり，結果としてみれば，経常収支黒字を出している国はつくったよりも少ない量しか食べていないのであって，つくったよりも少ない量しか食べないことが原因で経常黒字を出しているのではない。

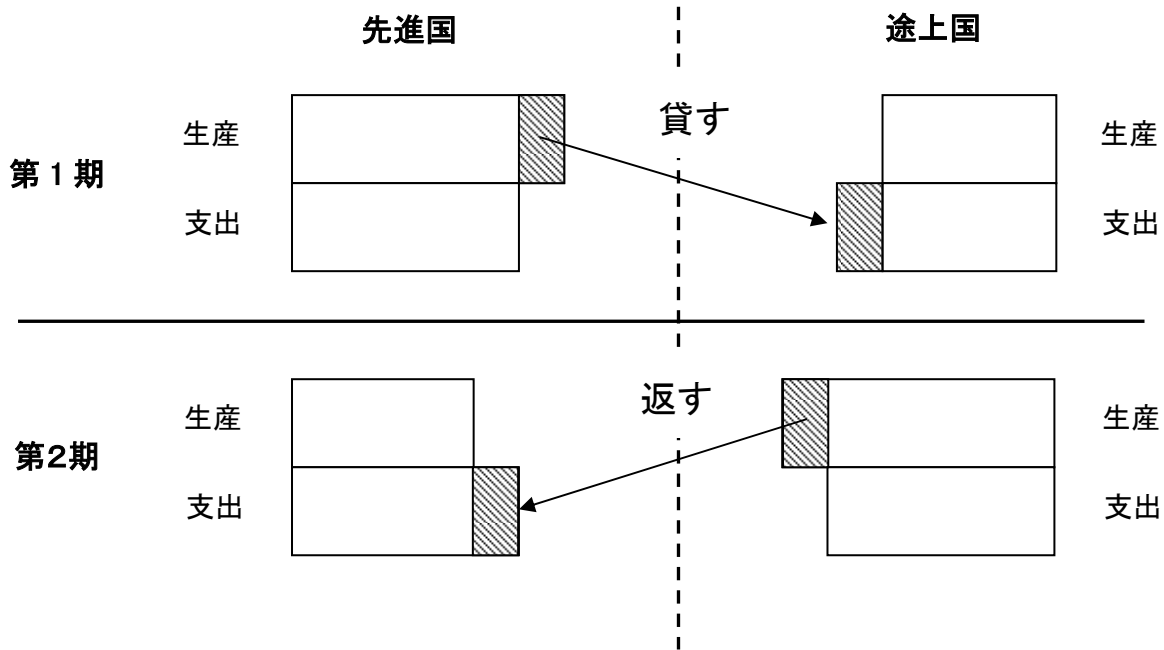
補論：経常赤字は国にとって必ずしもマイナスではない

先進国は，第1期は非常に多くのものをつくることができるが，高齢化が進展して第2期の生産量は大幅に減少してしまうとする。一方，途上国は第1期はあまり多くのものをつくることはできないが，資本設備が充実する第2期には生産が大幅に増加するでしょう。

このとき，それぞれつくったものをそのまま食べるとすると，先進国は第1期には多くのものを食

べることができるが、第2期には少しのものしか食べられないことになる。一方、途上国は第2期には多くのものを食べるができるが、第1期には少しのものしか食べられない。すなわち、どちらの国も、第1期と第2期とで食べる量が大きく変動することになる。

この状況で、それぞれの国が生産を超えて食べる（他国から借りる・経常赤字を出す）、あるいは生産以下しか食べない（他国に貸す・経常黒字を出す）ようにすると、図のように食べる量をお互いに安定させることができる。



先進国は、第1期に経常黒字を出しておく、その分第2期に生産よりも多く支出することができる（経常赤字を出すことができる）ので、生産の落ち込む第2期にも同じだけのものを食べる事が可能となる。

一方、途上国は、第1期に経常赤字を出すことで、生産よりも多く支出することが可能となる。ただし、第1期の借りを返さなければならないので、生産の増える第2期には支出を少なめにして（＝経常黒字を出して）先進国に返済しなければならない。

先進国・途上国どちらも、経常黒字・経常赤字を計上できるおかげで、生産が変動しても支出額を一定に維持することができる。

すなわち、各国は経常黒字・経常赤字を出すことによって、生産のアップダウンによって食べる量が変わってしまうことを避けているのである。

(2) 貯蓄，投資，経常収支の関係

マクロ経済学で言う「貯蓄」とは，家計の可処分所得（所得から税金を引いたもの）から消費支出を引いたもの，つまり，家計がつくったもののうち，食べないでとっておく部分を指す。

$$\begin{aligned}
 Y &= C + I + G + CA \\
 \underline{Y - T} &= C + I + G + CA - T \\
 Y - T - C &= C + I + G + CA - T - C \\
 Y - T - C &= I + G - T + CA \\
 S &= I + (G - T) + CA
 \end{aligned}$$

左辺・右辺から
T（税金）を引く。

左辺・右辺から
Cを引く。

同じことを言葉で言い換えると…

家計が食べないで
とっておくもの

=

企業による利用

+

政府が収入を超えて
利用する分
財政赤字

+

外国が利用する分

	貯蓄	=	投資	+	財政赤字	+	経常収支
ベースケース	100		70		10		20
ケース 1	100		70		40		-10
ケース 2	100		70		0		30
ケース 3	100		100		10		-10

- ケース 1 財政赤字が大きい国は，経常赤字を計上する傾向がある。
- ケース 2 財政赤字が小さい，あるいは財政黒字の国は，経常黒字を経常する傾向がある。
- ケース 3 民間の投資意欲が旺盛な国は，経常赤字を計上する傾向がある。

3 国際収支表 (Balance of Payments)

3-1. 国際収支表の基本

国際収支表とは…

外国へ出て行ったモノ (の金額) と, 外国から入ってきたモノ (の金額) とをカウントし,

① ある一定期間にどれだけの取引が行われたか

② 取引の収支状況 (赤字? 黒字?) を

明確にする表のこと.

日本では財務省が作成・発表している.

モノが出ていく取引を貸方 (credits) に, 入ってくる取引を借方 (debits) に, それぞれ取引金額を記入していく.

	貸方 Credit (モノが出ていく)	借方 Debit (モノが入ってくる)
例 1 ソニーが米国人に PSP (20,000 円) を輸出 → モノ (PSP) が出ていく → 貸方に 20,000 円を記入	20,000 (例 1)	
例 2 Apple 社が日本人に iPod (17,800 円) を輸出 → モノ (iPod) が入ってくる → 借方に 17,800 円を記入	100,000 (例 3) 200,000 (例 5)	17,800 (例 2) 500,000 (例 4)
例 3 アメリカ人が日本人株主からソニー株を 10 万円分購入 → モノ (株式) が出ていく → 貸方に 100,000 円を記入		1 億円 (例 6)
例 4 日本人がアメリカの銀行に 500,000 円分の預金をする → モノ (預金証書) が入ってくる → 借方に 500,000 円を記入		
例 5 日本企業がアメリカで株式を 200,000 円分発行する. → モノ (株式) が出ていく → 貸方に 2,000,000 円を記入		
例 6 日本銀行がアメリカの保険会社から米国国債を 1 億円分購入. → モノ (国債) が入ってくる → 借方に 1 億円を記入.		

一般に、モノの動きと反対にお金の動きがある。

したがって…

モノの出っていく取引（貸方）＝ お金の入ってくる取引

モノの入ってくる取引（借方）＝ お金の出っていく取引

つまり、国際収支（貸方－借方）とは、外国とのお金のやりとりにおいてプラスだったかマイナスだったかを表している。

実際には、取引の種類により3つに分類して計上する

- ・ 製品・サービスの取引 → 経常勘定・経常収支 (current account)
- ・ 資本の取引 → (狭義の) 資本勘定・資本収支 (capital account)
- ・ 政府・中央銀行による資産の取引 → 外貨準備増減 (official reserve asset)
- ・ 資本の取引 (政府・民間の区別なし) → (広義の) 資本収支

	貸方	借方
経常勘定	20,000 (例 1)	17,800 (例 2)
資本勘定	100,000 (例 3) 200,000 (例 5)	500,000 (例 4)
外貨準備増減		1,000,000 (例 6)

経常収支 = 20,000 - 17,800 = 2,200 経常収支の黒字

(狭義の) 資本収支 = 100,000 + 200,000 - 500,000 = -200,000 資本収支の赤字

外貨準備増減 = -1,000,000 政府の外貨準備の増加

(広義の) 資本収支 = (狭義の) 資本収支 + 外貨準備増減 = -800,000

取引の種類によらず、全ての貸方・借方の差を国際収支と言う。

国際収支 = 経常収支 + 資本収支 + 外貨準備増減

= 経常収支 + 広義の資本収支

【注意】

外貨準備増減が“マイナス”のとき、政府の外貨保有は“増えている”。

マイナスなのに「増える」とはこれいかに？

日本政府による外貨建資産購入 = 外国政府債券の流入 = 借方 (マイナス)

日本政府による外貨建資産売却 = 外国政府債券の流出 = 貸方 (プラス)

したがって、政府がネットで外貨準備を増やしている時、貸方 (売却) - 借方 (購入) がマイナスになる。

3-2. 複式計上の原則

例 1

- ① 日本の企業が中東の石油会社から原油を 5000 万ドル分輸入.
- ② 一方で, 日本企業はこの代金を, 自分の預金口座から石油会社の預金口座へと振り込むことで支払う.

- ① 日本にモノ (原油) が入ってくる ⇒ 借方
- ② 日本からモノ (預金証書) が出ていく ⇒ 貸方

	貸方	借方
経常勘定		5,000 万ドル (①)
資本勘定	5,000 万ドル (②)	
外貨準備増減		

例 2

- ① 日本の保険会社がアメリカの証券会社から米国国債 1,000 万ドルを購入.
- ② 一方で, 日本の保険会社はこの代金を, 米国の銀行にある自分の預金口座から相手の預金口座へと振り込む.

- ① 日本にモノ (米国政府債券) が入ってくる ⇒ 借方
- ② 日本からモノ (預金証書) が出ていく ⇒ 貸方

	貸方	借方
経常勘定		
資本勘定	1,000 万ドル (②)	1,000 万ドル (①)
外貨準備増減		

ある取引の裏には, それと逆方向のモノの流れが存在する.

⇒ 常に, 貸方・借方に同じ額の取引が計上される. = 複式計上の原則

⇒ 国際収支表の貸方と借方の収支尻は常にゼロになる.

⇒ 国際収支はつねにゼロである (バランスする).

$\text{経常収支} + (\text{広義の}) \text{資本収支} = 0$
--

3-2 経常収支と対外純資産

再び、経常収支と対外純資産の関係を思い出してみよう (2-2 (3)).

経常黒字 \Rightarrow 対外純資産の増加 (ネットで貸出)

経常赤字 \Rightarrow 対外純資産の減少 (ネットで借入)

この関係は、以下のように「国際収支 = 0」からも確認することができる。

経常収支 + 広義の資本収支 = 0 より、

経常収支 $> 0 \Rightarrow$ 広義の資本収支 < 0

資本収支赤字

\Leftrightarrow 借用書の流出 (借入) $-$ 借用書の流入 (貸出) < 0

\Leftrightarrow 貸出が借入を上回っている = 対外純資産の増加

同様に、経常赤字が対外純資産の減少を意味することも確認することができる。
自分で確認してみよう。